

## 国際教育協力における言語問題の一側面について 英語における「まじめさ」の周辺語彙の構造をケーススタディとして

小原 一馬

(広島大学教育開発国際協力研究センター)

### 1. はじめに

教師の教育上のコミットメントに関して、給料などの物質的・外発的インセンティブに比して、教えることそのものの楽しさや達成感といった精神的・内発的なインセンティブがより重要であるということが言われている(Fruth, Bredson, Kasten 1982)。その一方で発展途上国(の少なくとも一部)においては、人々の教師を職業として選択するかしないかの判断において、給料などの外発的インセンティブが特に重要だということも知られている(Chivore 1988, Nwagwu 1981, Towse et al. 2002, Yong 1995)。しかしこれらの発展途上国では財源不足のため、優秀な教師を十分な数確保するために現在以上手当てを増やすことには困難があると考えられる。そのため特に発展途上国においては、教育改善のために教師の内発的インセンティブをいかに高めていくかが重要であると考えられる。

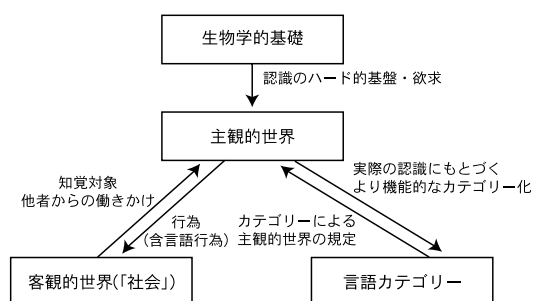
ところでこうした内発的インセンティブの有り様の重要な部分は、社会と大きく関わっている。教師の内発的インセンティブの例として、Thom (1992)は、「教師であることの名誉」などを挙げているが、無論こうした「名誉」は社会が教師一般をどのように評価するかに関わっている。またさらに単に「教師」である名誉よりも、「よい教師・優れた教師」として評価される名誉のほうがより重要であることは言うまでもないだろう。そして、こうした評価は、それぞれの文化が持つ個人個人の性格に対する一般的な価値観を反映しているものと考えられる。

本稿の目的は、このようなそれぞれの文化が持つ人物評価の価値観に、その文化が用いる言語の意味構造がどのように反映しうるかを考察するための手段を検討することにある。

文化に対する言語の影響のうち、もっともラディカルな見方は、「サピア=ウォーフの仮説」、特にその「強い仮説」に代表される(Penn 1972)。この「強い仮説」は「人間の思考は言語に規定される」ということを意味し、しばしば「言語決定論」とも呼ばれる(東郷 2001)。「サピア=ウォーフの仮説」にはこの「強い仮説」のほかに「弱い仮説」も含まれ、そちらは「概念の範疇化は言語・文化によって異なる」という、文字通り「弱い」主張となっている(東郷 2001)。この「弱い仮説」はしばしば「言語相対論」として呼ばれるが、概念の範疇化が言語・文化によってある程度異なっていることは広く受け入れられていると言ってもよく、問題はどの程度異なっているのか、という点にある。「言語決定論」の反対の極には、「言語普遍主義」あるいは「言語生物学的決定論」と呼ばれる立場があり、言語学、人類学、生物学などの学際的分野で論争が続いている。<sup>(1)</sup> そうした議論は無論あらゆる領域をカバーしているとは言い難く、これまで特に注目されてきたテーマは、色や人の感情の範疇化に関して、それらがどの程度普遍的であり、どの程度特定の言語や文化に特徴的であるかといったものであった。<sup>(2)</sup> こうした色や感情といったテーマは、特に人間の生物学的特質が、主観的世界の範疇化の基礎になっていると比較的想定しやすいために選ばれたといえるだろう

が、本稿で扱う人の性格や特徴の範疇化はそれらに比べ、より密接にそれぞれの社会における実際の人の有り様を反映し、文化ごとに独特の発達をとげているものと想定される。この言語カテゴリーと生物学的基礎、社会との関係を図式化すると次のようになる(図1-1参照)。言語普遍主義は生物学的基礎から主観的世界を経由し言語カテゴリーに至る矢印を特に重視している。一方、言語相対主義は言語カテゴリーから主観的世界を経由して客観的世界へ至り、再びそこから主観的世界を経由して言語カテゴリーに戻ってくる循環をより重視しているといえよう。

図 1-1: 言語カテゴリーへの影響のモデル



本稿における人物のカテゴリーに関して言うなら、生物学的基礎として人間に普遍的と考えられる様々な欲求があり、それらを基準として見える客観的世界における様々な人の存在が主観的世界として前言語的に与えられる、ということ言語普遍主義では考えることになる。そしてそうした前言語的世界に沿って、様々な言語に普遍的な言語カテゴリーが作られる、と考えるに違いない。とはいえ、ここでいう「様々な人の存在」の仕方は、社会や文化に応じてそれぞれに大きく異なっていることを我々は知っている。それは山は緑で海は青く血は赤いという、色においては比較的想像しやすい客観的世界の「普遍的性格」とは条件が大きく異なってくる。むしろそうした領域においては、人が言語カテゴリーなどを用いて人を分類し、その分類に

基づいて行動し、それが社会における役割期待のダブルコンティンジェンシーにより人を枠にはめていく、という側面が比較的重要になるだろう。また社会の変化により、そうした期待に沿わないような結果がでるなら、カテゴリーを精緻化していくという動きが見られると考えられる。つまり上記の「言語カテゴリーから主観的世界を経由して客観的世界へ至り、再びそこから主観的世界を経由して言語カテゴリーに戻ってくる」という循環がより重要になるということだ。

本稿はこのような言語相対主義的視点から、英語における人物描写の形容詞の意味構造の分析を行う。その際、日本語との比較という観点から、日本語で「まじめ」に比較的对応していると考えられるような英語の周辺語彙の構造を明らかにしたい。「まじめ」という日本語を選択したのは、この語が外発的なインセンティブとは無関係に仕事に励むようなパーソナリティを意味する極めて日本的な表現であると考えたからである。(3) この点により日本の教育文化の海外移転において、「まじめさ」という概念が例えば英語を通じてどのように受容されるか、ということは一つのケーススタディとしての価値を持つであろう。

日本語と英語(および中国語)の意味構造の比較としては、感情の分野において最近、二つの先行研究(Moor, Romney and Rusch 1999, Russel and Sato 1995)が行われている。前者は次のように進められている。まず自由に想起された感情表現の出現頻度により語彙のリストを作り、そのリストの上位から各国語における翻訳で対応する語彙を選ぶ。そのリストから語彙を三つ選び、近いものを答えてもらう、という方式で、語彙リスト全体の意味構造を明らかにしている。この方法論は大変洗練されているが、問題がないわけではない。まずこの方法は翻訳によって似たような意味を保證されている英、中、日の語彙が、実際確かに似たような関係にあること

を別の方法で確認しているに過ぎないとも言える。ゆえにある言語ともうひとつの言語での語彙の1対1対応のはっきりしない場合にはこの方法を用いることはできない。特に「構造」の類似と相違を知りたい場合、対応する語彙そのものが不在であっても、語彙の性格を規定する因子の性格の類似と相違さえ判断できれば十分ということもあるだろう。そうした場合には別の方法論を用いることが必要になる。後者の研究では、顔写真を外的指標として、それぞれの言語の感情語彙との対応から英・中・日の感情語彙の意味構造の類似性を確認している。問題点としては、顔の表情が持つ意味がそれぞれの文化で等しいと必ずしもいえないということが挙げられるだろう。

さて本稿では、これらの先行研究とは異なり、英語における「まじめさ」に対応する周辺語彙の意味構造を明らかにするために類義語辞典を用い、類義語・反義語の情報をもとに語彙間の類似性に関するマトリックスを作成する、という方法を用いている。この方法の優れた点は、大量の語彙の相互の類似性に関するマトリックスを比較的容易につくることができる点にある。例えば Moor, Romney and Rusch (1999)のように、語彙リストの中から3つ組をつくり、複数の被験者に近いものを選んでもらう、という方法では、語彙リストが少しでも長くなると、3つ組の数も膨大となり、とても一般の被験者に評価してもらうことは不可能になってしまう。類義語辞典を用い、より多くの語彙を含むマトリックスを用いることにより、語彙の性格を規定する多くの因子を見出すことが可能となる。感情の語彙とは異なり、より言語相対性の高いことが予想される人物評価の語彙の構造においては、語彙一つ一つの位置づけよりも、こうした因子の性格の異同を見極めることがより重要となるだろう。

問題点としては、類義語辞典における類義語の選定が、その言語の一般的話者の言語観

を十分代表しているか、という点が挙げられる。この点に関しては別の方法でのチェックが行われることが望ましいが今後の課題である。また今回は英語と日本語の比較を意図しつつも、日本語において同等の類義語辞典が入手できなかったため、英語の語彙構造を日本語話者の視点から分析するにとどめる。

## 2. 方法

英語の類義語辞典としては、CD-ROM版のWEBSTER'S NEW WORLD DICTIONARY AND THESAURUS ver. 2.0 (1998)を用いた。使用する語彙は次のように選んだ。

まず英語における「まじめさ」に対応する語彙を選び、中核とする。辞書には講談社『英辞郎』および研究社『リーダーズ英和辞典第二版』を用い、どちらかに現れた austere, businesslike, conscientious, decent, demure, earnest, faithful, grave, honest, humorless, no-nonsense (non-nonsense), serious, sober, solemn, square, staid, steady, straight を選んだ(語彙リストA)。(4)

次に類義語辞典でこれらの語の類義語を選択。さらに類義語の類義語、類義語の類義語の類義語というかたちで語彙のリストを作成、リストBとする。(5)同時にリストBより、比較的意味の広い語を集め、リストCを作成。リストA+リストCの語彙ひとつずつを変数とし、リストA+リストBの語彙ひとつずつを1ケースとして、各ケースの語彙が各変数の語彙の類義語として挙がっていた場合「1」、反義語として挙がっていた場合「-2」、自分自身に関しては「2」、何も挙がっていない場合は「0」としてマトリックスを作成した。(6) なお語彙の重なりを避け、語彙の反義語がわかりやすくするため、dis-や-lessといった接頭辞・接尾辞がつく語彙はペアとして1ケースあるいは1変数として扱い、ペアの

反義語（たとえば witty に対する witless など）が類義語として挙がっている場合には、「-1」の点数をつけた（例えば dull の類義語として witless が挙がっていれば、の witty/witless のケースの変数 dull に対する得点を -1 とする）。また同様に、strong/weak、rich/poor などの自明な反義語の組もこうしたペアとして処理した。

2 でできあがったマトリックスをもとに因子分析を行い、主因子法とバリマック

ス回転により比較的意味のとりやすい 15 の因子を抽出。<sup>(7)</sup> その際共通性が 0.1 以下の変数を取り除いた。さらに回帰法により因子得点を計算し、各ケースの 14 の因子得点を二乗し合計した値が 1 以下のケースを取り除いた。このような方法により残った 310 の語彙（ないし語彙のペア）のリストを表 2-1 に掲げる。

以上の手続きによって選ばれた語彙を用い、因子分析を行った。

表 2-1 分析に用いた語彙のリスト（太字は変数として使用）

aboveboard, **accurate**, active(/in-), **aggressive**, **agile**, **ambitious**, amiable, amusing, apathetic, arrogant, ascetic, **assiduous**, attentive, **austere**, average, avid, awkward, **balanced**(/un-), bashful, biased(/un-), bold, **brave**, bright, brisk, **businesslike**, **calm**, **candid**, **careful**, careless, **casual**, ceremonious, **chaste**, **cheerful**, circumspect, **classical**, clean, **clever**, comical(comic), committed, common, **competent**, **complicated**, composed, **confident**(/diffident), **conscientious**, **conservative**, considerate, constant, conventional, **cool**, **cordial**, correct, corruptible(/in-), courteous, **cruel**, **cunning**, **cynical**, **deceitful**, **decent**, decisive, **deep**(/shallow), deft, deliberate, **demure**, dependable, detached, **determined**, **devoted**, **devout**, **difficult**(/easy), **dignified**, **diligent**, **diplomatic**, direct(/in-), disciplined, divine, **docile**, dogmatic, dry, **dull**, dutiful(/un-), **eager**, **earnest**, **easygoing**, economical, **efficient**, elegant, emphatic, **energetic**, **enthusiastic**, equitable, ethical, even, exact, expeditious, experienced, extreme, faint, **fair**(/un-), **faithful**(/faithless), fallible(/in-), fanatical(fanatic), **feminine**(/masculine), fierce, **firm**(/in-), **flexible**(/in-), forceful, formal, forthright, frank, fresh, friendly, **funny**, **gay**, generous, genial, gentle, genuine, good, **graceful**, grand, **grave**, great, **grim**, guileless, **happy**(/un-), harmful(/harmless), harmonious, heartfelt, **heavy**, holy, **honest**(/dis-), honorable, hopeful(/hopeless), **humble**, **humorous**, **idealistic**, **impassive**, impeachable(/un-), imperturbable, imposing(/un-), indifferent, **indulgent**(/non-), industrious, **innocent**, **intelligent**(/un-), intense, intent, **interested**(/dis-), **ironic**(/ironical), **judicious** (judicial/in-), just, **kind**(ly/un-), lazy, learned, legal, legitimate, liberal(/il-), literal(-ly), lively, loving, loyal, manly, **mature**(-d), **melancholy**(/melancholic), mellow, **merciful**(/merciless), mild, **moderate**, modest, moral, naive, natural, neutral, nice, noble, **no-nonsense**(/nonsensical), **obedient**(/dis-), **obliging**, **old**(/older), open, **orderly**(/dis-), painstaking, partial(/im-), **partisan**, passionate(/dis-), **passive**, patient(/im-), patriotic, **peaceful**, **pensive**, **pessimistic**(/optimistic), **philosophic**(-al), pious(/im-), pitiful(/pitiless), plain, poised, **polite**(/rude), **positive**(/negative), **practical**, precise, principled, profound, **proud**, punctilious, **punctual**, pure, purposeful, questionable(un-), quiet, rational, real, realistic(/un-), reasonable, reflective, **regular**(/irr-), relaxed, **reliable**, **religious**, reputable, reserved, resigned, resolute, resourceful, respectable, responsible, restrained, reverent(-ial), rich(/poor), right, righteous, rigorous, **romantic**(/un-), **rough**(/smooth), rustic, sacred, safe, sane(/insane), sarcastic, satisfied, **savage**, scheming, scrupulous, secure, **sedate**, sedulous, selfish(/un-), sensitive, serene, **serious**, **severe**, sharp, **shy**, silly, **simple**, **sincere**(/in-), **skillful**(/skilled), **slow**(/rapid), smart, **sober**, **solemn**, solid, somber, **sophisticated**(/un-), sound, square, **staid**, steadfast, **steady**(/un-), stern, stoic, **straight**, straightforward, **strict**, **strong**(/weak), **stubborn**, **stupid**, **submissive**, **subtle**, sure, systematic, tasteful(/tasteless), thorough, thoughtful(/thoughtless), timid, tolerant, tough, tranquil, transparent, true, trustworthy, truthful, unaffected, untiring, **upright**, urgent, venerable, veracious, vigorous, violent(/non-), virtuous, **warm**, weighty, wholehearted, willing(/un-), wise(/unwise), witty(/witless), womanly, worthy, zealous

### 3. 分析結果 1 15 因子の分析

まず、この 310 の語彙および語彙のペアを主因子法とバリマックス回転により因子分析にかけ、15 の因子を抽出した。<sup>(8)</sup> その結果が表 3-1 である。また、同時に回帰法により因子得点を求めた結果が表 3-2 になる。

なお参考のため、日本語の「まじめな」の類義語としてその英語訳を用いた場合の因子

得点を表 3-2 の下部に添えてある。絶対値で 1 以上となったのは因子 1、2、6 であり、他の因子との関係はほとんどみられなかった。すなわち英語の発想法において「まじめさ」を位置づけると「高潔で信頼に値し」「重厚で」「活発で勤勉」だということになる。この点についての考察は結論で再び取り上げ、以下にまず各因子に関し見ていくことにしよう。

表 3-1 15 因子回転後の因子行列

	因子															
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	
honest	0.75									-0.13						
upright	0.64									-0.12						
reliable	0.63						0.12	0.17		0.11		-0.22				
faithful	0.63									0.24		-0.25				
conscientious	0.50					0.11										
deceitful	-0.47														0.13	
sincere	0.44								0.19		-0.19				-0.12	
straight	0.44					-0.10	0.15	0.21		-0.12						
decent	0.38		0.22			-0.12			0.11	-0.14		0.27				
fair	0.38		0.12		0.10	-0.18		0.18	0.23	-0.26	0.16	0.15	-0.11			
candid	0.38					-0.11			0.28	-0.16						
accurate	0.36				0.11			0.22	-0.14		0.13				0.18	0.11
innocent	0.33								0.29	-0.11		0.11				
religious	0.25	0.11							-0.12	0.12						
devout	0.23									0.18						
grave		0.74														
serious		0.72					0.14									
sober		0.61						0.30			0.20				-0.10	0.13
solemn		0.59		0.39				-0.11								
staid		0.57						0.10								
dignified		0.53														
sedate		0.45								0.11	0.27					
earnest		0.43				0.27	0.16				-0.30				-0.10	
no-nonsense		0.35			0.12		0.10									0.31
classical		0.25														
kind			0.77													
merciful			0.68													
cruel			-0.59				0.22									
savage			-0.57						0.19							
indulgent		-0.14	0.45					-0.16	0.15							
polite			0.42		0.15			0.26				-0.21				
obliging			0.36							0.23	-0.14					
happy				-0.75												
cheerful				-0.72												
gay		-0.18		-0.62										0.12		
melancholy				0.56												
grim		0.12	-0.16	0.55			0.27									
pessimistic				0.45								0.18	0.18			0.15
pensive		0.25		0.25	0.14								-0.11			
intelligent					0.81								0.10			
stupid					-0.74											
deep					0.60				-0.17							
judicious					0.55			0.23	-0.13		0.27					0.16

	因子														
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
dull		0.16		0.15	-0.46	-0.26		0.16							-0.12
philosophical					0.36						0.23				-0.12
diplomatic	-0.13				0.17			0.15			-0.10		0.11	0.12	
diligent						0.61		0.20							
businesslike						0.57		0.13						0.21	0.16
assiduous						0.54		0.14							
slow					-0.16	-0.44					0.14				
energetic						0.43		-0.16				-0.10		0.23	
eager						0.33				-0.10	-0.29			-0.11	
ambitious	-0.11					0.32	0.13			-0.13	-0.21				
agile				-0.12		0.23			0.12					0.23	
old		0.12			-0.10	-0.16	-0.15							0.16	
determined						0.22	0.69					-0.15			
flexible			0.11				-0.63	-0.18							
stubborn							0.58								
severe		0.14	-0.44				0.57		-0.14			0.18			
firm	0.16						0.53	0.11				-0.35			
austere		0.13	-0.14	0.13			0.25	-0.11				0.18			
strict	0.19		-0.11				0.25	-0.10	-0.14		0.11	0.10		0.12	
rough			-0.27				0.15	-0.54	-0.21			0.20			
regular	0.12							0.49							
orderly								0.45				0.11			
steady	0.13						0.17	0.41			0.11	-0.28			
punctual	0.19					0.11		0.40							
careful	0.13					0.30		0.39	-0.20		0.22				
moderate		0.11	0.10					0.39	0.18		0.33	0.12			
calm	-0.16	0.17		-0.11	0.13	-0.11		0.35	0.17		0.31	-0.13		-0.14	
conservative							0.22	0.30							0.12
balanced					0.22	-0.11		0.27	0.16	-0.12				0.13	
casual								-0.22	0.15		0.21				
simple					-0.27				0.60		0.10	0.15			
difficult			-0.20		0.10		0.13	-0.10	-0.59			0.12			
complicated									-0.47						
sophisticate	-0.10		0.16		0.12				-0.39					0.16	
easygoing	-0.10		0.23						0.35	0.23	0.22	-0.11			
heavy						-0.14			-0.34		0.13			-0.15	
docile			0.18						0.26	0.67		0.12			
submissive										0.55		0.24			
obedient	0.12									0.54					
passive						-0.26		0.12		0.53		0.19			
aggressive						0.27	0.15	-0.15		-0.32		-0.12			
devoted	0.26									0.29	-0.21	-0.20		-0.11	
peaceful	-0.12			-0.11				0.21	0.17	0.21					
cool					0.13			0.22			0.51			-0.13	
enthusiastic					0.12	0.44					-0.48				
interested	-0.11					0.14					-0.44				
warm											-0.42				
impassive		0.10									0.35				
cordial			0.17								-0.29				
partisan										0.15	-0.20	-0.11		-0.10	
confident												-0.53			
shy												0.52		-0.13	
brave							0.24					-0.38			
strong		-0.10				0.17	0.36					-0.37		0.20	
demure										0.12		0.37			
humble							0.12		0.13	0.29	0.12	0.34			
positive	0.12			-0.12			0.17					-0.26	-0.13		
feminine						-0.14	-0.11	0.13			-0.12	0.26			
chaste	0.13						0.12		0.14			0.25			

	因子														
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
proud		0.10		-0.11			-0.14			-0.23		-0.25			
ironic													0.82		
humorous													0.65		
funny		-0.16		-0.29									0.59		
clever	-0.10				0.23			-0.12					0.47	0.41	
cnical				0.27									0.42		
subtle									-0.20				0.28		
skilled														0.69	
efficient						0.23								0.52	0.20
competent	0.12													0.43	
cunning	-0.26				0.15								0.13	0.35	
graceful								0.21	0.26		-0.11			0.33	
mature			0.11						-0.18					0.27	
idealistic															-0.77
romantic															-0.75
practical					0.13										0.71

因子抽出法: 主因子法  
 回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法 (表を見やすくするため因子の絶対値 0.1 以下に関しては表記を省略)

各因子の性格は表 3-2 にはっきりあらわれていると考えられる。この表および表 3-1 に基づき、簡単に因子の説明を行う。

因子 1 は「高潔で信頼できる」ことを表していると考えられよう。この因子との関係の強い語彙の性格から、英語という言語に埋め込まれた「高潔な人とはどのような人か」という発想を知ることができる。まず第一に「高潔さ」の基準の一つとして、reliable に代表される「信頼に値する」ということがあることが伺える。またこの因子には、faithful、religious、devoted、devout など信仰に關係する語彙の変数が高い因子負荷を示しており、それらの要素も「高潔さ」の評価と關係していることがわかる。<sup>9)</sup> またこの因子に高い負荷を示しながら他の因子にも比較的高い負荷を示す語彙を見ると accurate などが因子 8(「落ち着いて注意深い」)や因子 14(「有能な」)にある程度因子負荷を示している。reliable と accurate の類義語關係などを通じて、「高潔さ」に技術的な正確さに繋がる連想が含まれることがわかる。こうした発想は英語独特のものであろう。

他に、上記に挙げた faithful は因子 10(「従順さ」)にも高い因子關係を示しているが、faithful 同様、因子 1 において「高潔で信頼

できる」方向に位置づけられている fair は逆に因子 10 にマイナスの負荷を示し、因子 1 と因子 10 とが英語の発想法において切り離されていることが見える。つまり「高潔で信頼できる」人は「従順」とは限らず、「気難しく扱いづらい」可能性もある、ということがいえる。同様に faithful は reliable とともに因子 12 にマイナスの因子負荷を示し「自信がありしっかりした」方向に位置づけられているが、逆に decent はプラスの「謙虚で恥ずかしがりな」という方向におかれ、やはり因子 1 と因子 12 を切断していることが見てとれる。英語の発想において「謙讓」が必ずしも美德ではないことがうかがえよう。こうした点から、統計上「独立」とされる因子間の關係にも、単なる無關係な場合と、複数の語彙を通じて「切断」という關係を持つ場合とがあることは注意すべきであろう。<sup>10)</sup>

なおリスト A の「まじめな」の英語訳のうち、conscientious、faithful、honest、straight が因子得点の上位ケースに挙がり「まじめさ」との關係は比較強い。英語訳を類義語として因子得点を計算した場合のケース得点は 1.79 で日本語の「まじめさ」を英語の発想法のなかに位置づけられた場合「高潔で信頼できる」という側におかれるこ

表 3-2 15 因子の各因子に関するケースごとの因子得点（回帰法による）

1	2	3	4	5					
高潔で信頼できる	重厚な	親切で寛容な	暗く悲観的な	賢い					
reliable	4.74	serious	5.81	kind(ly /unkind)	6.42	melancholy	5.57	intelligent(/un-)	4.95
honest(/dis-)	4.47	solemn	5.73	merciful	4.91	(melancholic)		judicious	4.79
faithful(/faithless)	4.44	grave	5.52	(/merciless)		pessimist(-ic)	3.69	(judicial /in-)	
upright	3.34	sober	5.50	gentle	3.49	/optimistic		sane(/insane)	4.02
righteous	3.03	dignified	5.00	thoughtful	3.04	pensive	1.67	deep(/shallow)	3.87
conscientious	2.58	earnest	4.25	(/thoughtless)		solemn	1.66	wise(/unwise)	3.57
sincere(/in-)	2.44	staid	3.49	easygoing	2.95	cynical	1.62	thoughtful	
straight	2.37	sedate	3.36	indulgent(/non-)	2.59			(/thoughtless)	3.53
honorable	2.33	venerable	2.39	tolerant	2.48			rational	3.16
trustworthy	2.27	no-nonsense	2.12	generous	2.38			learned	2.76
scrupulous	2.23	(/nonsensical)		decent	2.33			profound	2.40
moral	2.21			genial	2.01			witty(/witless)	2.30
true	2.16							bright	2.10
accurate	2.13								
reputable	2.10								
responsible	2.02					genial	-2.32		
						lively	-3.36		
partial(/im-)	-1.82			selfish(/un-)	-1.48	bright	-3.47	careless	-1.39
cunning	-1.85			severe	-2.36	hopeful(/hopeless)	-4.53	silly	-1.41
impeacheable(/un-)	-2.11	silly	-1.26	fierce	-2.51	gay	-5.88	simple	-2.28
corruptible(/in-)	-2.43	indulgent(/non-)	-1.31	savage	-3.92	cheerful	-6.10	dull	-5.62
deceitful	-3.13	gay	-1.46	cruel	-6.33	happy(/un-)	-6.71	stupid	-6.31
卑劣で信用できない		明るく馬鹿げた		冷酷で野蛮な		明るく活発な		愚かな	

因子得点の絶対値が 2 以上のものを表示。ただし 2 に満たないものも 1 以上のものに関しては各因子のプラスマイナス各 5 つまでは表示

まじめ 1.79 4.54 -0.02 0.08 -0.47



6	7	8	9	10	
活発で勤勉な	確固として頑なな	落ち着いて注意深い	単純で自然体の	従順な	
active(/in-)	4.86severe	5.62steady(/un-)	3.69simple	3.56docile	5.92
diligent	4.43determined	5.35careful	3.44mild	3.11humble	4.99
businesslike	4.04firm(/in-)	4.66regular(/irr-)	3.27natural	2.94submissive	4.54
careful	3.59resolute	4.44precise	3.19careless	2.54passive	4.30
assiduous	3.47stubborn	4.01calm	3.00easygoing	2.25obedient(/dis-)	3.85
industrious	3.38untiring	2.32exact	2.73naivete	2.21resigned	3.80
enthusiastic	2.99strong(/weak)	2.76moderate	2.69frank	2.16faithful(/faithless)	2.40
earnest	2.70secure	2.06constant	2.56	devoted	2.40
sedulous	2.70	tranquil	2.37	obliging	2.24
energetic	2.54	even	2.25	willing(/un-)	2.05
ambitious	2.31	sober	2.07		
intent	2.20				
slow(/rapid)	-1.51genial	-1.18indulgent(/non-)	-1.51heavy	-2.55just	-1.15
apathetic	-1.78indulgent(/non-)	-1.24sharp	-1.52formal	-2.60violent(/non-)	-1.28
dull	-1.88liberal(/il-)	-1.38easygoing	-1.55sophisticated(/un-)	-3.80active(/in-)	-1.54
passive	-2.06reasonable	-1.79violent(/non-)	-2.84complicated	-4.69fair(/unfair)	-2.05
lazy	-2.40flexible(/in-)	-6.06rough(/smooth)	-3.79difficult(/easy)	-6.28difficult(/easy)	-2.32
怠惰でやる気のない	柔軟な	乱暴でいい加減な	形式ばって難しい	積極的で気難しい	

1.02

0.03

-0.06

-0.40

0.65

11	12	13	14	15					
冷静で無関心な	謙虚で恥ずかしがりな	ユーモアのセンスのある	有能な	現実主義的な					
calm	3.98	humble	4.03	ironic(ironical)	7.24	skillful(skilled)	6.78	practical	7.41
indifferent	3.73	modest	3.73	funny	5.26	efficient	4.61	realistic(/un-)	6.06
cool	3.46	shy	3.20	humorous	4.66	clever	3.76	no-nonsense	1.97
apathetic	2.56	timid	3.18	clever	4.60	competent	3.64	(/nonsensical)	
careful	2.45	demure	2.11	witty(/witless)	4.44	cunning	3.33	efficient	1.78
judicious	2.07	bashful	2.06	comical(comic)	4.15	experienced	2.95	economical	1.61
(judicial /in-)		feminine	2.01	dry	3.54	graceful	2.95		
		(/masculine)		cynical	3.08	businesslike	2.78		
				sharp	2.74	strong(/weak)	2.75		
				subtle	2.62	deft	2.37		
				sarcastic	2.57	accurate	2.16		
friendly	-2.15								
polite(/rude)	-2.65	steady(/un-)	-2.10	positive(/negative)	-1.24				
earnest	-2.75	firm(/in-)	-2.29	confident(/diffident)	-1.52	philosophic(-al)	-1.18	wise(/unwise)	-1.41
interested(/dis-)	-2.78	secure	-2.33	melancholy	-1.64	slow(/rapid)	-1.23	passionate(/dis-)	-1.99
passionate(/dis-)	-3.10	brave	-2.38	(melancholic)		enthusiastic	-1.45	liberal(/il-)	-2.46
enthusiastic	-3.33	strong(/weak)	-3.30	serious	-1.93	calm	-1.51	romantic(/un-)	-7.19
warm	-3.72	confident(/diffident)	-4.10	reverent(-ial)	-2.80	awkward	-2.84	idealistic	-7.48
暖かで熱心な	自信がありしっかりした	真剣な	不器用な	理想主義的な					

0.51

0.36

0.00

0.08

0.37

とがわかる。次に因子 2 だがこれは「重厚さ」を示しているものと解釈できる。この因子の因子得点上位のケースに挙がる語のうち venerable を除けば他全てが、「まじめさ」の英訳語であり、「まじめさ」のケース得点も 4.54 と非常に高く、「まじめさ」との強い関係を示している。「まじめさ」としてこうした訳語を用いる場合、英語ではこの因子の意味する「重厚さ」として受け取られるであろうことがわかる。

さてこの因子においても、この因子と他の因子に同時に負荷の高い語彙について見ていくと、まず solemn, gay, pensive が因子 2 と因子 4 (「暗く悲観的な」) の双方に比較的高い因子負荷を持つことがわかる。これらはみな一方がプラスならもう一方もプラスという同方向を向いており、他の比較的低い因子負荷を無視すれば、因子 2 と因子 4 は一つの因子に統合される可能性を秘めている。実際後に見るように因子数を 6 にまで減らしたとき、この二つの因子は「暗く重厚な / 明るく楽しげな」という一つの因子になっている。他に因子 1 のときと同様の切断的關係も見られる。earnest は因子 11 にマイナスの負荷を示し、「暖かで熱心な」性格を示すが、sedate と sober が逆方向の「冷静で無関心な」側に置かれ、因子 2 と因子 11 の関係を切断している。すなわち重厚であることは必ずしも冷静であるとは限らず、熱心であることもありうるということだ。

以下の因子は「まじめさ」との関係が比較的弱くなるので興味深い点だけを見ていこう。

因子 4 (「暗く悲観的な」) と因子 2 の関係はすでに見た。因子 4 はまた funny や cynical

を通じて因子 13 (「ユーモアのセンスのある」) ともつながっている。これも切断的關係の典型的例として挙げられる。<sup>(11)</sup>

因子 6 は「活発で勤勉」であることを意味していると考えられる。この因子も「まじめさな」の英訳語のうちの diligent や earnest を通じて「まじめさ」と多少の関係を示している。因子 6 の「まじめさ」の因子得点も 1.02 と比較的高めである。careful や aggressive などにより因子 8 (「落ち着いて注意深い」) と関係し、因子 8 の「大胆 / 慎重」の軸に「活発 / 無気力」の次元を加えている。日本語の発想では「大胆 = 活発」「慎重 = 無気力」と考えがちのように思われるが、例えば careful は慎重でかつ「活発」という位置づけがなせられ、英語においては別の発想があることをうかがわせる。ただし日本語の「活発」はやはりしっくりこず、例えば「生産的」といったものとして捉えるべきかもしれない。

因子 7 は「確固として頑なな」ことを意味しているといえよう。日本語でも、確固として決然たることと、頑固に凝り固まることなどはともに、「固い」という文字を用いる点で共通項を持つが英語でも同様のようだ。

因子 9 は「単純で自然体」であることを示していると考えられる。この因子に高い負荷を持つ主要な語彙は因子 5 (「賢さ」) と一貫した関係 (「賢く形式的で難しげ / 愚かで単純で自然」) にあり、6 因子抽出では一つの因子となる。日本語において、素朴さや自然さは必ずしも単純さや安易さを意味しないように思われ、英語の思考法的一端がうかがえる。

因子 10 は「従順さ」を示していると考えられるが、その反対の極には difficult ( / easy ) や fair などが並び、比較的わかりにく

い。扱いにくさなどを示しているのだろう。ただし obedient のペアである disobedient もこちら側におかれているので、いわゆる「反抗的」という意味ももちろん含まれている。また因子得点のプラス側でも passive と willing が並び、受身と自発という日本語では正反対を意味する概念が、英語の発想の中では従順さ(というよりも扱いやすさか)の枠内で括られることを示している。

因子 11 は「冷静で無関心な」を意味していると考えられる。日本語でも「冷静」と「冷淡」など、「冷たい」という文字を通じてこれらを一括りにする発想がないわけではないが、改めてそれらの共通性に目を向けようとすると多少不思議に映る。その反対の極における「熱さ」と「暖かさ」も、確かにともに「冷たさ」に対立するという意味での共通項はあるが、これらが類義語かと言われると首を傾げる。さらに言えば、polite を礼儀正しさと訳せば、むしろ日本語では冷静さを意味しているようにも感じる。英語文化と日本語の文化の人に接する礼儀の有り様の違いとも解釈できる。

因子 13 は「ユーモアのセンスがある」ことを示していると考えられる。この因子については因子 4 のところで少し触れた。この因子の因子得点のマイナスの極には reverent や serious などが並び、これらが「ユーモアのセンスのない」ことを意味する語彙であることがわかる。その意味で日本語の「まじめさ」に近いが、英訳による因子得点は 0.00 で、この方法によると「無関係」であることになってしまっている。

まとめとして、次のことが言える。A. 英語における人物描写の形容詞において、「ま

じめさ」の周辺語彙の意味構造として、その類義語・反意語関係から 15 の独立の因子を抽出することができる。B. この 15 の因子の性格は日本語の感覚でも十分理解可能であり、日本語と英語の意味構造の類似性は明らかだが、その一方で英語に特有と思われる部分も見られる。C. 15 の因子は独立だが、いくつかの因子は多義的な語彙を通じて、互いに「切斷的」な関係を持っている。英語において焦点化される切斷的關係には、特徴的な部分がある。D. 15 の因子の性格を決定づけている主要な語彙に関してのみについて言えば、それらの一部は複数因子と一定方向の關係(ex.「重厚なものは暗い」)を持ち、その特徴はさらに少数の因子に集約的可能である。こうした集約の有り様にも日本語と共通する部分、相違する部分がある。E. 日本語の「まじめさ」という概念はその英語訳を通じて、英語の意味構造のなかに位置づけることが可能だが、その位置づけは日本語におけるそれとは異なっている可能性がある。

では次に、因子数を絞る事によって特に D の点についてさらに詳しくみていくことにしよう。

#### 4. 分析結果 2 6 因子の分析

さきの節では、15 の因子を抽出して分析を行ったが、本節では同じ語彙リストを用い、因子数を 6 に絞って同様に因子分析を行うこととしよう。<sup>(12)</sup>因子数を減らすことにより、より基本的な構造が見えるはずである。その結果は表 4-1 で、15 因子の分析と同様、表 4-2 に因子得点の表をまとめている。<sup>(13)</sup>なおやはり 15 因子の分析のときと同様、「まじめ

な」の英訳語をその類義語とすることで「まじめな」の因子得点を求めている。(結果は表 4-2 の下部に)その結果因子 2 と因子 5 のみで 1 以上の因子得点となった。すなわち「暗くて重厚」で、「健やかで冷静」だということになる。これについてはまた結論で述べる。



表4-2 6因子の各因子に関するケースごとの因子得点(回帰法による)

高潔で信頼できる		暗く重厚な		冷酷で厳しい		熱心で前向きで力強い		穏やかで冷静な		思慮深く難しげな	
reliable	4.81	solemn	5.32	cruel	4.81	active(/in-)	3.73	calm	5.02	judicious	4.09
honest(/dis-)	4.24	serious	5.27	severe	4.66	earnest	3.24	sober	3.34	(judicial /in-)	
faithful(/faithless)	3.89	sober	3.88	difficult(/easy)	2.62	resolute	2.81	moderate	3.26	intelligent(/un-)	3.92
upright	3.15	earnest	3.76	fierce	2.35	strong(/weak)	2.59	steady(/un-)	2.83	wise(/unwise)	3.45
righteous	2.63	grave	3.59	grim	2.29	diligent	2.55	judicious	2.79	sane(/insane)	3.18
straight	2.55	dignified	3.16	savage	2.20	enthusiastic	2.50	(judicial /in-)		thoughtful	3.18
fair(/unfair)	2.31	melancholy	2.56	rough(/smooth)	2.11	hopeful(/hopeless)	2.42	cool	2.64	(/thoughtless)	
sincere(/in-)	2.31	(melancholic)				ambitious	2.39	tranquil	2.61	deep(/shallow)	2.87
conscientious	2.28	sedate	2.33			determined	2.35	careful	2.57	rational	2.29
moral	2.17	pensive	2.32			businesslike	2.25	rational	2.16	clever	2.24
true	2.13	staid	2.32			firm(/in-)	2.13			difficult(/easy)	2.19
honorable	2.11	no-nonsense	2.15							witty(/witless)	2.14
trustworthy	2.07	(/nonsensical)		thoughtful	-2.23					learned	2.06
accurate	2.02			(/thoughtless)						sophisticated	2.04
reputable	2.01			mild	-2.24					(/un-)	
				polite(/rude)	-2.29					sharp	2.04
				gentle	-2.44						
				genial	-2.49	submissive	-1.85				
partial(/im-)	-1.76	bright	-2.16	indulgent(/non-)	-2.58	docile	-1.85	passionate(/dis-)	-2.04	happy(/un-)	-1.64
cunning	-1.81	funny	-2.33	easygoing	-2.80	pessimist(-ic)	-2.02	interested(/dis-)	-2.04	careless	-2.62
impeacheable(/un-)	-2.06	cheerful	-2.54	flexible(/in-)	-2.93	/optimistic		rough(/smooth)	-2.27	simple	-2.99
corruptible(/in-)	-2.11	happy(/un-)	-3.93	merciful(/merciless)	-3.28	passive	-2.23	violent(/non-)	-2.41	dull	-3.57
deceitful	-2.80	gay	-4.34	kind(ly /unkind)	-4.44	humble	-2.49	enthusiastic	-2.41	stupid	-4.63
卑劣で信用できない		明るく楽しげな		親切で人当たりよい		謙虚で悲観的な		情熱的で荒々しい		単純で気楽な	
まじめな	0.80		3.76		0.32		0.82		1.12		-0.58

まず最初に、15の因子が6つの因子にた  
たみこまれることでどのような要約がなされ  
たのか見てみることにしよう。

1 高潔で信頼できる		高潔で信頼できる
2 重厚な	4 暗く悲観的な	暗く重厚な
3 冷酷で野蛮な	7 確固として頑なな	冷酷で厳しい
4 明るく活発な	6 活発で勤勉な	10 積極的で気難しい
12 自信がありしっかりした	14 有能な	熱心で前向きで力強い
8 落ち着いて注意深い	11 冷静で無関心な	穏やかで冷静な
5 賢い	9 形式ばって難しい	思慮深く難しげな
13 ユーモアのセンスのある	15 現実主義的な	x

因子（「高潔で信頼できる」）については、  
15 因子のそれとほとんど変わらないので、  
因子2 から見ていこう。

因子（「暗く重厚な」）はすでに15 因子  
の分析のところですで見たとように2と4の  
因子が統合されてできていると考えられる。  
無論統合の際には、もとの因子のディテール  
は消え、例えばcynicalはfunnyと同様「楽  
しげ」だけれどfunnyと異なり「暗い」、と  
いうような「明暗」のより深い次元は消えて  
しまっている。「暗い/明るい」と「重々し  
い/楽しい」とが一体になって「暗く重々し  
い/明るく楽しい」となり、「暗くて楽しい」  
ものが抜け落ちてしまっている。とはいえ  
「暗く重々しい/明るく楽しい」という対立  
こそが、英語の思考法におけるより重要な軸  
であることには間違いない。そしてそこに英  
訳の「まじめさ」が位置づけられることにな  
る。「明るく楽しい」ものとは正反対の側に。

因子（「冷酷で厳しい」）は、15 因子にお  
ける因子3と7が統合されていると考えられ  
るが、この統合で消えたものは比較的目立た  
ない。表3-1を見ても、因子3と7とで負荷  
の絶対値0.1以上のものは全て一貫して逆方  
向の記号がつけられている。親切で寛容なも  
のは、原則として柔軟で、冷酷で野蛮なも  
のは原則として確固として頑なだ、という発想  
が英語にある、ということだろう。

因子（「熱心で前向きで力強い」）には15

因子の分析における様々な因子がためこまれ  
ているので解きほぐす必要があろう。このう  
ち特に興味深いのは因子10（「従順」）と12  
（「謙虚で恥ずかしがり」）である。表3-1に  
より、因子10と12でプラスマイナスが逆方  
向になっているものを探すと、「従順」でか  
つ「自信がありしっかりした」という側に  
reliable、faithful、easygoing、devoted、  
partisan「積極的で気難しく、謙虚で恥ずか  
しがり」の側にdecent、fair、innocentが  
見つかる。それ以外に因子10と12の因子得  
点において、「従順」でかつ「自信がありし  
っかりした」という側にloyal（1.58,-1.37）  
constant（1.04,-1.71）「積極的で気難しく、  
謙虚で恥ずかしがり」の側にpure（-1.02,  
1.33）が見つかった。<sup>(14)</sup> このように、基本構  
造として「従順なものは謙虚で恥ずかしが  
り」という、日本語的感觉と一致するものが  
あるにせよ、そのさらに奥には例えば  
faithfulに代表される、従順でかつ自信に満  
ちた有り様というものが想定されていること  
がわかる。

因子 は因子8（「落ち着いて注意深い」）  
と11（「冷静で無関心」）が統合されたもの  
として理解できる。15 因子の分析において  
因子11における「冷静さと冷淡さ」「熱心さ  
と暖かさ」の括り方に関し、日本の感覚で言  
うと不自然に感じられ、またpoliteなどは  
「暖かい」とも言い難いと述べた。そうした



感覚から言えばむしろ「落ち着いて注意深い」と「冷静さ」、そしてその逆の「いい加減で乱暴な」と「情熱的」の親和性はより高いように感じられる。実際その通りだとすれば8と11の因子の統合で、はねられるのは「いい加減で無関心な」傾向と「落ち着いて注意深く暖かな」傾向ということになるだろう。実際に8と11の因子の因子得点で逆方向の強い点数をつけた語彙を調べると、一方の側にはliberal(/il-) (-1.29,1.23)、casual (-1.49,1.08)、easygoing (-1.55,1.37)、indifferent (-1.19, 3.73)、rough(/smooth) (-3.79,1.29) が挙がり、もう一方の側にはpolite(/rude) (1.43,-2.65)、graceful (1.81,-1.08)、formal (1.56,-1.31)が挙がる。<sup>(15)</sup> 前者は確かに「いい加減で無関心」と言えるだろう。後者について言えば、因子11の「暖かで熱心な」の側で、「いい加減で乱暴」とは言えないような語彙を選ぶと、politeなど、礼儀正しさに関係する語彙が残る。因子ではこうした語彙が無視されることによって、「穏やかで冷静／情熱的で荒々しい」という、日本語とも共通するような基本構造が残っている。

最後の因子は因子5(「賢さ」と9(「形式ばって難しげ」)の統合されたものと考えられるが、特に目立った矛盾例(「賢くて自然体」だとか「愚かで形式的」など)は見つからない。そういった語彙も、探せばないことはないのかもしれないが、位置づけは比較的特殊ということになるのだろう。そうした点も日本語との発想の違いと言えるかもしれない。

本節のまとめだが、本節は基本的には前節のDの内容をより具体的に見たことになる。すなわち前節で見た15の因子の性格は6因子の抽出でも重要な部分は残しつつ、新しい因子のなかに統合されていると言えるが、その統合のされ方には日本語と共通するもの以外に、英語に特有の思考法も見える、ということである。そうした具体的内容のうち、本

稿の関心から特に興味深い点として、15因子における「重厚な／明るく馬鹿げた」と「暗く悲観的な／明るく活発な」の因子が6因子では統合されて「暗く重厚な／明るく楽しげな」という因子をつくる、ということが挙げられよう。本説の最初に述べたように、「まじめさ」はこの因子の「暗く重厚な」という側に位置づけられることになる。

## 5 . 結論と考察

結論として、まず第一に方法論的ファインディングとして、類義語辞典により言語の意味構造を見ることは十分に可能だということが確認された。この方法は特に非常にたくさん語彙が互いに関係しあう複雑な構造を客観的に明らかにする上で適していることがわかった。第二に、そうした方法論を用いることにより英語における「まじめさ」に直接・間接に関係するような語彙310の内在的な意味構造が、15ないし6の因子として明らかになった。第三に、そうして明らかになった英語の人格描写に関する語彙の意味構造は、日本語の言語感覚でも概ね理解可能で、共通するところも大きい。部分的に異なっている可能性が見出された。第四に、英語の意味構造において、日本語の「まじめさ」をその英訳語によって位置づける場合、基本的にまず「暗く重厚」で「穏やかで冷静」な部分もある、として位置づけられることがわかった。これは「明るく楽しく」「情熱的で荒々しい」ことの正反対という位置づけに他ならない。またさらに分解して詳しく見ると「重厚で」「高潔で信頼に値し」「活発で勤勉」であるとも言える。しかしこれはあくまで英語の意味構造における位置づけであり、日本語の意味構造における様々な次元はそこでは不完全な形でしか表現されていないと見たほうがよいであろう。

特に第四の点から、日本の教育文化の海外移転に際し、「まじめさ」に関係する価値観

の重要性を英語の逐語表現によって伝えようと試みるならば、「明るく楽しく情熱的」なことの正反対として理解されるであろうことが推測される。「明るく楽しく情熱的」なことをより好ましいとするような文化からみれば、「まじめさ」を一つの徳目とするような価値観はなかなか受け入れ難いに違いない。「まじめさ」の価値観に限らず、これまで国際教育協力の場面において、これに類した誤解は生じつづけてきたものと考えられる。こうした問題の解決の方法として、概念を紹介する際には単にそれだけを逐語訳で取り出すのではなく、できるだけ元の幅広い文脈とともにその構造こそを伝える必要がある、ということを我々はこのケーススタディーから学ぶことができるであろう。

## 注

- (1) ただしもっとも普遍的な立場においても、文化や言語ごとの意味構造の違いを事実として無視しているわけではなく、そうした違いを語彙の複雑さの程度の問題へと還元し、人間に生得的な語彙発達の優先順位を見ようとしている。その代表例は Berlin and Kay 1969。
- (2) 色の範疇化に関しては、Saunders and van Brankel (1997) が詳細なレビューを行っている。彼ら自身は、普遍主義的な主張が根拠とするデータのすべてに合理的な疑いを提示し、相対主義的立場をとっているが、上記註の Kay や Berlin など普遍主義の論客を含め、この分野の多数の学者のコメントとおよびそれらへの Saunders and van Brankel からの再コメントが同時に収録されており、この分野での議論の全体像を追うのに大変便利である。感情に関しては Lutz and White (1986) および Mesquita and Frijda (1992) が詳細なレビューを行っている。これらはともに、普遍主義的な議論もレビュー

しつつ、感情の社会的・文化的文脈を重視することで、より相対主義的な立場にたっているといえる。一方、Russell (1997) のレビューでは、それまでに収集された様々な文化・言語における感情の範疇化の有り様の多様性をまとめつつも、同時にその類似性と普遍性を強調している。

- (3) 例えば神田・高木 (1986) では、国立教育学部の学生、小学校教師、主婦の3グループに対し、教師にとっての必要な適性をたずねているが、そのほとんどのグループで「誠実さ」が上位に挙げられている。「誠実さ」は、「まじめさ」の類義語であるがより意味が限定される傾向があるため、今回はより多義的な傾向を持ち、日常的に使用される頻度の高いと考えられる「まじめさ」を用いた。ちなみに他にも日本における教師のイメージなどに関する研究はいくつかあるが、それらでは「まじめさ」を質問項目で採用していない。これはおそらく「まじめさ」の多義性がむしろ分析を困難とするからであろう (cf. 植木 1984、櫛田・豊田 1993、大野木・吉田 1992)。なおまじめさと非外発的なインセンティブとの関係については小原 (1999) を参照。

- (4) serious-minded や sobersided など辞書に挙がっていたが、serious や sober の合成語とみなし省略した。また on the level といった熟語は意味が狭くなり、同義語や反義語が得にくいため全て省略した。humorless は本文の説明にもあるように humor と humorless の反義語のペアとして、no-nonsense は nonsensical の反義語のペアとして処理している。

- (5) その際、原則として 合成語や熟語表現は省略 同義語・反義語の範囲がほぼ重なる語は一方を選ぶ 人の形容に用いられる語だけ選ぶ ただし の他に、直接感覚的な多義語 (heavy など) はイ

メージ的な思考の基礎となるものとして、類義語の範囲を広げる効果があるため残した。

- (6) 反義語を-2としたのは、類義語に比べ、辞書に反義語としてあがる語彙の数が圧倒的に少なく、より精選されているものと判断したため。
- (7) ちなみに16の因子をとると15の因子とほぼ同様の因子に加え、宗教的な献身さに関するものと思われる因子が取り出される。しかし3-2のような表を作ってみると+の側にはfaithful、religious、devotedなど非常にわかりやすい語彙が挙がるのに対し、マイナスの側にはfair、determined、earnestなどが並び、解釈に苦しんだ。Fairは非常に類義語の数が多いため、それらの累積効果によるものだろう。一方、14の因子をとると15の因子抽出の場合における13番目の因子がなくなり、それ以外はほぼそのままとなる。
- (8) 紙幅により共通性の表は割愛するが、因子抽出後の共通性は方法の項で述べたように全てが0.1を上回った。また15因子の負荷量平方和の累計より、これらの因子は分散の34.2%を説明していることがわかる。
- (9) ただし同時にfanatic、dogmaticなどという語彙が弱いながらもマイナスの因子得点を示していることからわかるように、信仰の強さが必ずしも「高潔さ」の評価につながるわけではないこともわかる。なお上記の註にもあるように、この宗教的献身さに関する因子は因子の抽出数を16とすると、他の因子として分離する。
- (10) 「切断的」関係は、「XはAと限らず反Aでもありうる」として一般的に記述できる。
- (11) ユーモアにはfunnyのように明るいものもcynicalのように暗いものもありうる。それがユーモアだ。
- (12) 抽出する因子数を6としたのは、7以上

だと以下に見るの因子(「暗く重厚/明るく楽しげ」)があらわれず、主要な因子は15因子のものとそのままになってしまふのを避けたためである。ちなみに因子数を5とすると、さらにの因子が分解され、cleverやironicがfunnyやhumorousなどとの類義語関係によりの因子に加わって「暗く重厚で生真面目な/明るく楽しげでウィットのある」という因子となり、残りの要素の大部分はの因子と一緒に「穏やかで冷静で思慮深い/情熱的で荒々しく愚かな」となる。それはそれで興味深いのだが、因子数が少なすぎてもわかりづらくなるので、とりあえず本稿では6つの因子を選ぶこととした。

- (13) 共通性の表は紙幅により割愛する。一部の変数(casual, chaste, idealistic, mature, old, proud, romantic)の共通性は0.5を下回り、各因子にほとんど寄与していないが、本節の目的は15因子が6因子の抽出においてはどのように統合されるのか見ることにあつたため、あえて削除しなかった。なお6因子の負荷量平方和の累計より、分散の18.1%が説明されていることがわかる。
- (14) 括弧内はそれぞれ因子10と12の因子得点。
- (15) 括弧内はそれぞれ因子8と11の因子得点。

## 参考文献

- Berlin, B., Kay, P., 1969, *Basic color terms. Their universality and evolution*. Berkeley: University of California Press.
- Chivore, B.S.R., 1988, A review of factors that determine the attractiveness of teaching profession in Zimbabwe. *International Review of Education*, 34(1):59-77.
- Fruth, M., Bresdon, P., Kasten, K., 1982,

- Commitment to teaching: Teachers' responses to organizational incentives.* Report from the Program of student diversity and school processes. Madison : Wisconsin Center for Educational Research.
- 神田好恵・高木秀明, 1986, 「教師に対するイメージと教師としての必要な適性・条件」『横浜国立大学教育学部教育実践研究指導センター紀要』2: 19-59.
- 小原一馬, 1999, 「真面目さという戦略 授業予復習と受験勉強に見られる性差」『研究紀要 教育・文化・社会』6: 15-30.
- Laird, C. (principal thesaurus text) and Editors of Webster's New World Dictionaries, 1998, *Webster's new world dictionary and thesaurus Ver. 2.0*. New York : Macmillan
- Lutz, C. and White, G., 1986, The anthropology of emotions. *Annual Review of Anthropology* 15: 405-436.
- 松田徳一郎 (編), 1999, 『リーダーズ英和辞典 (第二版)』研究社
- Mesquita, B. and Frijda, N., 1992, Cultural variations in emotions: a review. *Psychological Bulletin* 112: 179-204.
- 道端秀樹 (監修), 2002, 『英辞郎』アルク
- Moor, C., Romney, K., Hsia, T., 1999, The universality of the semantic structure of emotion terms. *American Anthropologist* 101(3): 529-546.
- Nwagwu, N., 1981, The Impact of changing conditions of service on the recruitment of teachers in Nigeria. *Comparative Education*, 17(1): 81-94.
- 大野木裕明・吉田祥造, 1993, 「教育学部新入生の入学動機と教師イメージに関する調査研究」『福井大学教育学部紀要 IV(教育科学)』45: 63-83.
- Penn, J., 1972, Linguistic relativity versus innate ideas. The Hague : Mouton. (= 1980, 有馬道子訳 『言語の相対性について』大修館書店)
- Russel, J. A., 1991, Culture and the categorization of emotions. *Psychological Bulletin* 110: 426-450.
- Russel, J. A. and Sato, K., 1995, Comparing emotion words between languages. *Journal of Cross-Cultural Psychology* 26: 384-391.
- Saunders, B. and van Brankel, J., 1997, Are there nontrivial constraints on colour categorization? *Behavioral and Brain Sciences* 20: 167-228.
- Thom, D.J., 1992, Teacher trainees' attitudes toward the teaching career. *The Canadian School Executive* November: 28-31.
- 東郷雄二, 2001, 「インターネット言語学情報 : 言語相対論」『言語』10月号 (<http://lapin.ic.h.kyoto-u.ac.jp/intling/linguistic-relativity.html>)
- Towse, P., Kenta, D., Osakib, F., and Kiruac, N., 2002, Non-graduate teacher recruitment and retention: some factors affecting teacher effectiveness in Tanzania. *Teaching and Teacher Education* 18 (6): 637-652.
- 植木節子, 1992, 「教員養成課程における職業選択と学生の意識の4年間の変化」『千葉大学教育学部研究紀要』40(1): 291-308.
- Yong, B., 1995, Teacher trainees' motives for entering into a teaching career in Brunei Darussalam. *Teaching and Teacher Education* 11(3):275-280.